



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1980 精道教育促進協会(〒100 三丁目三番一十一番星市船戸町12-6)

教皇様の叢

信徒のつとめ

福音のパン種を社会に

教皇さまのアイランド巡礼さいごの宗教的な儀式はリマリック、グリーンパーク・リースコースでのミサだった。参加者は推定二十五万人。聖福音書朗読のあと教皇は以下のような説教をされた。

きょうあなたがたにお話したくおもいますのは、教会内で信徒にまかされているあの特別な尊厳と使命についてです。キリスト信徒は「王の司祭職、聖なる民」だと聖ペトロは述べています。(ペトロ前2・9) すべてのキリスト信徒は、洗礼によってキリストとその教会のからだに結び合わされ、神へと奉獻されているのです。自分が受け入れた信仰を告白するように、命ぜられているのです。堅信の秘跡によって、聖霊から、さらに特別なちからを恵まれ、キリストの証人となり、その救いの使命をともに担うものとなるのです。ですから、信徒はすべて、神のみめぐみという類稀なはたらきによってできあがった作品であり、聖性のたかみへとのぼるよう命ぜら

れているわけです。ときによると、信徒は、世間で活動している人間としてもっているその尊厳と仕事の価値を、十分には認めていないようです。「ごく平凡なひら信徒」などというようなものがあるのでしょうか。ありません。あなたがたはみな、イエズス・キリストの死と復活をとおして、信仰へと召し出されているからです。神の聖なる民として、この世界に福音をつたえるうえでの自分の役割を、完全に果たしていくことがあなたがたの使命なのです。いかにも、信徒は「選ばれた民族、聖なる司祭職」を受けた者ですが、また「地の塩」、「世の光」ともならねばなりません。そこには信徒に固有な仕事と使命とがあります。そ

れは、生活のなかで福音をあらわすことであり、さらに、そうすることで、生活と労働の場であるこの実際の世界に、やがては大きなちからとなる福音のパン種を、まぜていくことです。大勢としてこの世界を形づくっているのは、政治、マス・メディア、科学、テクノロジー、文化、教育、産業、労働などですが、こういったものこそまさに、信徒たちが得意の能力をもちいてその使命を果たしていくことのできる分野です。こうした分野での指導者となるひとが、ほんとうのキリストの弟子であり、どうじに、その面での知識や技術にも十分すぐれているひとならば、じつにそのときこそ、キリストのあがないのちからが、地の面を内がわから変えていくことになりましょう。

福音のパン種を社会に

こんにちの信徒は、キリスト信徒として、強力にその義務を果たすよう、もとめられています。その義務とはすなわち、福音のパン種を社会にゆきわたらせるということです。(…)いま人びとは将来へむかって道をえらばねばなりません。その道は、人類のあらゆる局面を変えて、あたらしい創造へとみちびくのでしょうか。それとも、経済成長と物質所有ばかりを大切にすぎ、精神的なことがらをなおりにした結果、たくさんの国々が歩んでしまった道をたどっているのでしょうか。神の掟のかわりに、つかのまの現世的な享樂をあたらしい道徳原理とすることになるのでしょうか。類魔への隷属でしかない、いつわりの自由へとみちびく道になるのでしょうか。ひとりひとりの人間の尊厳を、国家の全体主義的な支配に屈服させてしまうような道になるのでしょうか。階級のあいだの暴力をもちいた闘争への道でしょうか。神への反抗をほめたたえるような道でしょうか。すべての人々にわたしたは次のように申しあげたいのです。

秘跡のちからを信じよう

家庭とその生活をたつとび、外の攻撃からまもりなさい。信徒にとって、家庭はキリスト教の活動のさいしょの場であり、「王の司祭職」を主としてとりおこなう場所だからです。キリスト信徒の家庭はこれまで、霊的なちからのもっとも大きな源でした。現代のさまざまな事情と社会の変化によって、家庭生活およびキリスト教的な婚姻は、あたらしいかたちを生み、あたらしい困難に出会っています。

わたくしは言いたいのです。くじけてはなりません。緊密に結びついた家庭を時代おくれと見なす風潮にしたがってはいけません。こんにちキリスト教的な家庭は、教会および社会にとって、いままでのどのときよりも、重要なものなのです。

たしかに現在、結婚の不解消性と聖性とは、あたらしいかんがえかたや、ある人びとの野心によって、おびやかされています。離婚が、その理由のいかんを問わず、しだいに容易になっているのは、避けられないことだし、だんだん、生活のなかの普通のできごとと受けとられるようになってきました。離婚することもできることと民法は認めますが、法において離婚可能であるというそのことだけによっても、確固とした永続的な婚姻は、だれにであれ、いっそうむずかしいものとなりましよう。

なによりもまず、婚姻の秘跡がもつ驚くべき尊厳とめぐみに、たかく敬意をささげなさい。その秘跡の準備を真剣にこころがけなさい。結婚の結びつきをつよめるため、また人生の危機や難題すべてをともに克服するためイエズス・キリストの秘跡がさずけてくれる霊的なちからを、信頼しなさい。結婚した人びとは、みずからを聖化してくれる秘跡のちからを信頼しなければなりません。自分た

家庭と家族

(…) (一) 降誕はあまりにも内容の濃くゆたかな奥義であって、すべてを一度にながめることはできません。そこで、典礼がとくに光をあてる点に注目してみましよう。それは、ベトレヘムでのあの夜「みどり児」が誕生すると同時に家庭が始まった、ということでもあります。それゆえ降誕節八日間中の主日はナザレトの聖家族の祝日と定められているのです。「聖」家族と称されるわけは、「敵(悪魔)

でさえも「神の聖なるおかた」(マルコー・24)であると宣言せざるをえなかったイエズスの家庭であるから。また、お生まれになったおかたの聖性が、処女にして母であるかた、および、国勢調査中にベトレヘムで生まれた子供の父であると考えられていたヨセフの、特別な聖性のみなものになったからでもあるのです。聖家族は同時に人間的な家族ですから、教会は聖家族を通してすべての家族に語りかけるのです。神のおん子がお生まれになったこの家族は超自然の唯一例外的な性格、つまり聖性をその特徴とします。そしてそれと同時に、本質や義務、困難などわれわれの家庭に

だこの世に姿をあらわさぬその生命に攻撃をくわえれば、人間の幸福を真にまもってくれる道徳秩序せんたいのいしずえを、つきくずしていくことになるのです。誕生まえの生命にせつたい危害をおよぼさぬようにすることは、人間の権利と人間の尊厳を擁護することにもなるのです。全世界に対して、みなさんが、人間の生命がいかなる尊厳をもち、いかに聖であるかを示す証人となられんことを。父親であり、母親であるみなさん、ご自分のつとめを、信じておこないなさい。それは、神があなたたちにあたえられた婚姻のつとめへの、親としてのつとめへの、あのうつくしい召し出しです。神があなたたちとともにあることを信じなさい。天上でも地上でも、親

として子に対するすべての関係は、神に由来するものだからです。キリスト信者としてよい父親、よい母親になることよりも大切なことが、人生においてほかにある、などとおもってはいけません。世俗的な仕事につき、世俗的な職業で成功するほうが、母として生命を生み、その生命の世話をするつとめよりも大切だ、などという人びとに、母親が、若い娘が、少女たちが、耳をかたむけることのあるりませんように。教会の将来、人類の未来は、大部分、親自身と親がいとなむ家庭生活にかかっているのです。家庭を尊重するかどうかは、国家の偉大さをしめすほんとうの物指なのです。それはちょうど、人間の尊厳を大事にすることが文明の真の尺度であるのとおりなじです。 十月一日

母性に対する責任

母親の聖なる役目

ちの結婚をとおしてキリストの愛のちからを証言することが、そのつとめなのだと信じなければなりません。結婚にほんとうの愛と神のめぐみとがあれば、その結婚は、自分だけの利益のためにふたりならんで暮らしているというような、自己中心的な相互関係には、けっしてなりえないでしょう。

教会の将来は親にかかっている

そしてここで、すべての親である人びとに、とくに一言しておきたいのです。結婚は、子どもという贈りものを、両手をひろげて受け入れるものでなければなりません。ふたりの愛に対する神のめぐみとして、ひろいところで子どもを迎え入れる寛容さは、その夫婦がキリスト信者であることをしめす徴です。神

ついていえることはすべて聖家族にもあてはまるのです。実のところ、聖家族はまことに貧しい家庭でした。イエズス誕生のとき家はなく、すぐあとで逃げださねばならず、危険をくぐりぬけたあとともみずからの手で糧をえるために働く貧しくてつましい家族であったのです。

聖家族をみつめよう

聖家族をとりまく事情は多くの家庭のそれと変わりはありませんでした。イエズスの家庭は、新たないのちをうみだす男女の共同体であり、家庭と家庭との出合いの場であったのです。祭壇上でのみたえられ、尊ばれる家族ではなく、聖ルカと聖マテオの語るエピソードからもわかるようにわれわれの家庭にとつてちかしい家族でありました。(…)

となる、つまり夫婦は共同の出産者となり、新たな尊厳をえるとともに新たな義務を負うことになる。この基本的な義務はいろいろの点からみて非常に大切な意味をもっています。ただ家庭という特殊な共同体からみて大切であるだけでなく、社会全体、国家、学校、職業、環境、つまり人間の作るすべての共同体からみて大切なのです。全般的にみるならば、両親と家族が、どのような態度で基本的な義務を果すか、に關係しないものはなにひとつありません。両親のおかげでこの世に生を享けた子供、つまり「人間性」を得た新しいいのちが、どのような方法で、どの程度まで、「人間」としての生き方を教えられてきたか、すべてはこの一点にかかっているのです。この点から考えて、家庭にかわりうるものは何も存在しないことがわかります。

ご降誕の夜、おん母はおん子を出産まじかであったのに住むところはなかつた。ひとり人間を出産するという神秘的であり人間的な一大神秘が実現するためにふつう必要とされる条件でさえそろっていなかったのです。

説教・講話・書簡等の抄記

チャレンジ精神

信仰にあった考えとそれに首尾一貫した人道主義の考え方を分かちあわせてください。いま私が述べていることがらはひとつの叫び声、私たち一人ひとりに向けられた挑戦の雄叫びなのです。こんにちのように、新たないのちの誕生を待つ母がしばしば、道徳面で首尾一貫した態度を堅持できるかいなかを試みられるような時代には、なおさらそう考えられるのではないのでしょうか。実際、墮胎は遠まわしに「母性の中絶」と呼ばれていますが、このようなことは道徳律という真に人間的な物指、つまり良心という物指をつかつてのみ評価されるものです。この点については、告白場のうちあけ話を別にしても、「責任ある母性」のための診療所でのうちあければなしについて多くを語る事ができるでしょう。

というわけで、出産をひかえた母をひとりぼっちにすることはできません。産後、困難、誘惑に苦しむ母をひとりすることはできない。かたわらにつきそって、勇気と自信をあたえてやらねばならない。みずからの良心の負担を重くしないように、また、ひとがひとを尊重するという根本的なことを放棄することのないよう助けの手をさしのべなければならぬのです。事実いま述べたきずなこそ懐妊の瞬間に生じる関係であります。ですから、子を産まんとするすべての母親にはなんらかの仕方ですしよにいてあげなければならず、できるかぎりの援助を提供しなければならぬのです。

出産間近の聖母マリアに目をそいでみましょう。教会を構成するわたしたちはマリアをみつめることによって、主のご降誕がもたらす責任、この世界に生まれる一人ひとりの人間に対する私たちの責任、についてさらに深く理解するよう努力しなければならぬからです。(…)

一九七九年一月三日

夫婦は神の協力者

聖ペトロ大寺院に集う若人たちに

(…)きょうはナザレトの聖家族のことを考えてみましょう。イエズスとマリア、ヨセフの家族は「聖」なる「家族」、聖家族といわれますが、それはとくに、聖なるおん方であるイエズスのために築かれた家族だからであり、またそこには人間の家族に固有ないろいろな要素が備わっているからでもあります。

聖家族は貧しい家族でした。福音書にあるように、神のおん子のご誕生のときをみても、好んでそうしたわけではないにしろエジプトへの逃避のときをみても、あるいはナザレトでみずからの手をつかてつつましい暮らしをたてていたようすをみても、貧しい家族であったことがわかります。イエズスとマリアとヨセフの生活には、他の家族との相互扶助とつきあいやさらに広い枠である社会における生き方についてのこの上ない模範をみることもできます。わたしたちの家庭はこの神の模範にならって築かれねばなりませんし、イエズス・キリストとともに住むことによって、わたしたちは夫婦生活と家庭生活にかかわる簡単とは言えないいろいろな問題を解決してゆかねばなりません。この種の問題は、深く鋭いものですから、おたがいの助け合いと責任感がなければ解決できないことでしょう。

神はご心でもおられる

神はナザレトにおけるとおなじように、すべての家族のうちにおいでになり、人間社会のできごとのうちにも入りこまれます。家庭とは男女の一致から生まれ、その本質からして、新たな生命の誕生を目的とします。生まれてたいのちはとくに、熱心な教育を通して、

道徳的精神的成長および身体的成長の間中、家族の保護を受けるのです。ですから、家庭こそ、唯一無二の存在である一人ひとりの人間が、偉大なそして内的なあらゆるできごとをくりひろげる聖域であります。家庭には根本的に重要な義務があり、その義務をはたすことによって、「責任ある当事者自身」が高められ、新たな生命をこの世に送りだすにあたり直接に神の協力者となるのです。



家庭のかわりができるものはない

以上が、家庭とはなにもものにもとってかわられることのできない、それゆえ全力をあげて守られなければならない、といわれる理由なのです。たとえ何がおころうともあらゆる手を尽くして、家庭が何かにとつかわられるようなことをさけねばなりません。これは、一人ひとりの人間の「個人的」善を守るために必要であるだけでなく、社会と国家の善の

ためにも要求される重大事であります。家庭は、あらゆる分野において共通善の第一を占めるべきもの、なんと成れば、ひとはまさしく家庭内で懐妊され、誕生するからなのです。なんとしても実現すべきこと、それは、新たないのちを、その懐妊の瞬間から唯一無二で特有の価値を有する存在として愛し期待しつつ家族が生きることです。新生児は役立つ存在、大切でかけがえのない存在として愛され、評価されねばならない。万一、その子が五体満足でなかったり、虚弱であったりすればなおさらのことです。以上がご託身の奥義から学ぶ教えです。

苦しみと迷いをわかち合う

さいごにもうひとつ考えて欲しいことがあります。聖母マリアの心をこの上なく痛めた困難、だれであれ母たるものにとつてきわめて苦しい状況、つまり、生まれくるいのちのために住むところを与えてやれなかったときの悲しみと苦しみに思いをめぐらせてください。母になるといふことはすばらしい神秘であります。大勢の女性にとつては苦痛と迷いと誘惑の動機ともなります。胎内に息づくいのちをよるこんで受けいれる決意、その決意は往々にして数知れない困難に対する恐れをももたうとともに、つねに、神を支えるに安心感と、生まれいずべきひとりの人間への信頼感をもたらしめます。兄弟的愛徳と連帯意識で女性を包み、決して、ひとりぼっちにさせてはならない。とくに疑いにおそわれ心が動揺しているひとに対しては助けの手をさしのべねばなりません。その女性は、われわれ一人ひとりにとつても兄弟たるべき、一人の人間をこの世に送りだそうとしているからです。そのようなひとに対しては必要な援助を惜しまず、心の支えとなり、励ましを与え、希望をもたせようつとめなければならぬのです。

不変の教え

(…)みなさんは初聖体のため一所懸命よく準備されました。そのおかげでイエズスさまとの初めての出会いは、感動的で深い喜びあふれたものになりました。おめでたい初聖体の日を一生覚えておいてください。初聖体のときの熱心さときよい喜びを一生もちつづけてみましょう。

今ここにみなさんは、イエズスさまともう一度出会うために集まりました。(…)みなさんがいつもしっかりと信仰をたもち、ご聖体におられるイエズスさまをもっと心をこめて愛することができるよう、これからの生活が罪に汚れることのないように、少しお話をしたいと思います。

イエズスはわたしたちと共におられる

これがまず第一の点です。イエズスさまはいつもみなさんと共におられることを考えなければなりません。イエズスさまは復活し、天国にのぼられました。でもイエズスさまはわたしたちと共に、わたしたちのために、地球上のあらゆるところにとどまることも希望なさいました。そしてご聖体として残ってくださったのです。ほんとうにご聖体は神さまのすばらしい発明です。

ご自分の命を父なる神へのうやまいと愛の犠牲としてささげて十字架上で亡くなられました。しかし、そのまえにイエズスさまはご聖体の秘跡を定め、パンとぶどう酒をご自分のおん体とおん血にかえられたのです。それだけでなく、ごミサにおいてご自分自身を現存させる力を使徒たちやそのあとを継ぐ人たち、司教や司祭に与えてくださいました。

イエズスさまは永遠にわたしたちと共にいることを望まれました。イエズスさまは聖体拝領において、わたしたちとひとつになることを望まれ、イエズスさまがわたしたち一人ひとりに愛情をしめしてくださいましたのです。ですから、つぎのように申しあげましょう。

「イエズスさまはわたしを愛して下さい。私もイエズスさまをお愛ししています。(…)みなさんが、出会い、愛し、受け入れ、おなぐさめできるよう、イエズスさまはご聖体のうちにいらっしやいます。司祭のいるところにはどこにでも主はおいでになります。ごミサをたてることは、司祭の仕事です。司祭がすばらしいといえるのは、ごミサをたてることのできるからなのです。

都会にも、小さな村々にも、山奥の教会にも、アジアやアフリカにある小さな家にも、イエズスさまはいらっしやいます。強制収容所にさえ、ご聖体のイエズスさまはいらっしやったのです。みなさん、しばしばご聖体を拝領しましょう。そしてイエズスさまのお恵みを通して、どんなイエズスさまに似ていくようにつとめましょう。

初聖体を終えたみなさんへ 子供たちへ Iesus Christus Iesus

二つめの点にうつりましょう。つぎのことを絶対に忘れないでください。信者として生きていく私たちの一番の親友であり仲間であることをイエズスは切に望んでおられます。みなさんにはもちろんたくさんのお友だちがあります。けれどもいつも一緒にいることはできないし、困っているときにはいつでも助けてくれるわけでもないでしょう。話すことをなんでもいつも聞いてくれるわけでもないし、いつも慰めてくれるわけでもありません。

ところがイエズスさまは、みなさんを決して一人ぼっちにしないほんとうの友です。みなさん方一人ひとりをよくごぞんじなのです。名前もごぞんじです。毎日、いっしょにつきそい、いっしょに歩いてくださいます。うれいときにはいっしょに喜び、悲しいときには

はなぐさめてくださいます。イエズスさまに出会い、そして心から愛してください。ことごと、いつもわたしたちの愛をまわってくださることを知ったからには、もうイエズスさまなしには生きていけないはず。なんでも信頼して話すことができるのです。イエズスさまを愛するところと信頼する心があれば、愛と親しみをこめていつでも話しかけることができます。なんといいってもイエズスさまは、わたしたちのために、十字架の上でのちをささげてくださいましたのですから。イエズスさまとほんとうの友になる約束をしましょう。そして絶対にその約束をやぶらないでください。どんな時でも、どんなことがあっても、かならずいつも、友であるイエズスさまに話しかけなさい。恩恵をおしてわたしたちのうちにいてくださるイエズスさま

はなぐさめてくださいます。イエズスさまに出会い、そして心から愛してください。ことごと、いつもわたしたちの愛をまわってくださることを知ったからには、もうイエズスさまなしには生きていけないはず。なんでも信頼して話すことができるのです。イエズスさまを愛するところと信頼する心があれば、愛と親しみをこめていつでも話しかけることができます。なんといいってもイエズスさまは、わたしたちのために、十字架の上でのちをささげてくださいましたのですから。イエズスさまとほんとうの友になる約束をしましょう。そして絶対にその約束をやぶらないでください。どんな時でも、どんなことがあっても、かならずいつも、友であるイエズスさまに話しかけなさい。恩恵をおしてわたしたちのうちにいてくださるイエズスさま

ま、ご聖体の秘跡をとおしてわたしたちと共に、わたしたちのうちにえられるイエズスさまのところへかけよりなさい。みなさんのおうちで、友達の間で、またいつもの、遊び場所、休みの日をするところ、みんなが不満足で悲しい社会で、親友イエズスさまの教えを伝える役目を果し、イエズスさまがいらっしやることをひとびとに知らせあげようではありませんか。

イエズスはいつも待っておられる

さて、最後の点を考えましょう。人の一生というものは、長いにしても、短いにしても、天国へ向かう旅です。天国こそふるさとであり、ほんとうの家庭です。ほんとうの約束の場所なのです。イエズスさまが天国で待っていてください

ます。このあわれみ深くすばらしい真実をかたときも忘れないように。また、ご聖体拝領は天国の前ぶれにほかならないということ覚えておいてください。じっさい、イエズスさまご自身がご聖体のうちにわたしたちを待っていてくださいます。わたしたちは、そのイエズスさまに天国で顔と顔をあわせて会うことができるのです。

天国のことを忘れないために、天国のお父のおすまいへの歩みをとめないために、いまから天国を少しでもたのしむために、さあ、イエズスさまをしばしば拝領しましょう。(…)よい子のみなさん、おしまいにうひとつきいてください。イエズスさまをうけると、心のなかに恥ずかしいことのないよう心がけなさい。罪に汚れることなく、寛大になりなさい。(親に)よく従い、親切をつくし、よく礼儀を守りなさい。みなさんを見る人たちがみな生きるとは美しいことだ、とかがえることのできるようがんばってください。

二両親、親せきの方々へ

ご両親と親せきのみなさん、心からお願ひします。子供達を可愛がってあげてください、尊重してあげてください、子供たちをよく育ててください。子どもたちの靈魂は神のみ手によって造られました。子供達の靈魂がもつ神秘と清さにふさわしいひとになるよう努力してください。子供たちには、繊細な心づかい、良い模範がほんとうに必要なのです。子どもたちをほっておかないでください。かれらを裏切らないでください。

みなさん全員を天国にいますおん母であり、人生という海に輝く星、聖マリアにゆだねます。毎日マリアさまへお祈りください。いと聖なるマリアさまの方へ手をのびなさい。ふさわしい心でイエズスさまをお受けすることができるようマリアさまは必ず導いてくださることでしょう。(…)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料五十円 半年分予約約三百六十円送料三百円 一年分予約約七百二十円送料六百円 (一部の送料で三部送付可能) 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 072393